今日のイラスト 393　「 イラストでたどる萩往還⑳ キンチヂミの清水」　　古谷眞之助

板堂峠を越えれば、若干の上りはあっても、あとは山口市街までずっと下りとなる。そういう安心感がある上に、そこに冷たい清水が湧いていれば、殺風景な峠で休むよりは、ここの茶屋で休憩する方を誰もが選ぶだろう。しかも、冷やしたトコロテンで小腹を落ち着かせることもできるのである。ただ、数々の名所がある萩往還に何故このようなネーミングをしてしまったのか。清水の冷たさを強調したいのであれば、もっと何か別の言い方があるだろうに、と一寸首をひねってしまう。まぁ、語り部としてはどの文献にもそのように書かれているのだから、そのまま説明するしかないのだけれど。

このエリアも、長らく埋もれてしまっていたのを昭和 58 年に文化庁の予算がついて第一期工事として萩往還が復元される際に同時に整備されたものだ。残念ながら、今現在わずかに清水は湧き出ているものの、恐らく江戸期の勢いはないはずだし、水も「チチジアガルほど」冷たくはない。たぶん画面左手の山肌に何らかの変化があったと思われるし、植林も影響しているかもしれない。右写真は昭和 58 年、復元工事に先立って調査された時の「キンチヂミの清水」である。かなり荒れ果てているし、清水が湧き出ている様子もうかがえない。それを思えばまだ良い、とせねばならないだろう。

萩往還も一つの文化財と思っているのだが、他の文化財同様にそれを保存し、維持するのはなかなか難しい。自然のままに放置するというのも、極端にせよ一つの方法かも知れないが、そうすればこのような文化財はひとたまりもない。適度にかつ適切な方法で整備する必要がある。何よりもその存在を世に正しく知らしめ、実際に自分の足で歩いて体感していただくことこそが一番大切なのではないか、そう思ってガイドを続けている。「如何でしょう、来年春頃、一緒に歩いてみませんか」（2020.11.24 記）

イラストでたどる萩往還 ⑳ キンチヂミの清水

文・イラスト＝古谷眞之助

萩往還のガイドを始めて9年、ガイド回数も優に100回を超えたが、ここの説明をする際、特に女性にガイドする場合には少し抵抗感を覚え、苦笑しながら説明してしまうのが常である。その理由はこうだ。

昔ここには滾々と湧き出る清水があって、この先の六軒茶屋の住人、伊藤氏、藤井氏が旅人にトコロテンを提供していた。清水がとても冷たいためトコロテンもぐっと冷え、それを食べれば男性のシンボルも縮み上がる、ということでその名がついたと伝えられている。今から百年前頃までは萩往還を歩く人は冷えたトコロテンを味わえたと記録にある。ちなみに味付けは「しょうゆ」と「砂糖」の二種類だったという。